

Title	<書評>H. シェーファー著「近代デザインの根」
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 1971, 10, p. 104-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53753
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

H. シェーファー著

「近代デザインの根」

Herwin Schaefer;

The roots of modern design;

functional tradition in the 19th century.

Studio Vista, London, 1970.

「近代デザインの根」と題するこの書物は、20世紀のいわゆる機能主義革命が始まるずっと以前から存在していた機能主義について紹介している。著者は、ニューヨークの近代美術館のデザイン部門の長であり、その利点を生かして収集された豊富な写真が、大きな説得力を持っている。

ベヴスナーが、「モダンデザインの展開」の序の中で“私は最大の感謝をハーウィン・シェーファーに捧げる”と語っている程、彼等は親しい。ベヴスナーの書物が、モダンデザインの成立過程を、その主たる開拓者達の活動を叙述することにより、理念的に展開させているのに対して、シェーファーは、より具体的なデザイン所産の中にモダンデザインの根を探っている。この二冊は、デザインの相反する二つの性格、すなわちスターイズムに立脚したデザインと、大衆の中にアノニマスな形で浸透しているデザインとを、相補ないながら理解させてくれる。

我々はデザインについて、センセーショナルに取りあげられたものを中心に考えがちであるが、そのようなゆき方がある意味で危険である。というのは、それ等は時代の中でユニークであり、少数派であるからである。多数派はコメントを要せずに、大衆の日常生活の中にいわば土着的(vernacular)に存在している。シェーファーはこの vernacular という言葉を繰り返し、使っている。この書物は、スタイルとして洗練される以前の、物言わぬ土着的機能主義に光を当てたものである。そして、ともすればモダンデザインの華やかな展開中に切り捨てられがちであった土着性を省みた珍しい書物であるといえるだろう。生活の中で消耗されてゆくデザイン所産を元の形でとどめておくことは難しい。殆んど300枚にもわたる写真を独自な見解に基づいて集めたこのような書物は貴重である。作家や流派や時代に限定することなく集めた美しい写真が、素朴で生き生きとした生活の主体者としての大衆の息吹を伝えている。写真を見ているだけで楽しい書物である。

さて、シェーファーによれば、19世紀は混沌としていたが、機能主義的伝統だけは明白

な形で存続していたという。以下、しばらく彼の指摘を追ってみよう。機械や器具は殆んど200年も以前から機能的形態がとられていた。しかし貴族のおもちゃであった最初の旋盤や顕微鏡は入念な装飾を施こされていた。機械や器具が機能的になるためには、プロとしてのエンジニアや科学者の到来が必要であったのに対して、輸送機関は更に古くからモダンな形態をとって来た。多くのデザイナーが、船や車から彼等の機能主義のヒントを得ている。19世紀の家具や日常生活用品に関して我々は直ちに装飾過剰なデザインを想起するのであるが、シェーファーは、多くの貧しい人々、農民はもっと素朴で機能的なものを使用していたと指摘する。金属器や陶器も、素材感を基調とした簡素で美しい形のものが伝統的につくられている。

ところで、このような伝統的機能主義と、いわゆる機能主義とはどのような関係にあるのであろうか。

シェーファーは、機能主義スタイルの発祥を新しい道徳と真実を求めた19世紀の時代精神の中に見だしている。デザインはそこで重大な役割を荷うことになり、多くの芸術家は、絵画という自己満足的な表現手段を捨てて、建築や日常生活用品のデザインに向う。このデザインの革新は、芸術的(decorative)な方向と機能的(functional)な方向とを持っていた。ヴァン・デ・ヴェルデとムテジウスとの歴史的論争の焦点もそこにあった。しかし社会情勢の中で、装飾に対する興味は薄れ、一般消費者のため如何に機能的にデザインするかが中心課題となっていった。ムテジウス、ベーレンス、グロピウス、そしてサリバン、ライト、グリノー、ロース等の機能主義的傾向をもつデザイナーや建築家が続々と誕生する。ロースは、芸術とデザインを明確に区別し、有用なものは徹底的に使いやすくしなければならないとして、現代生活から、装飾をのぞき去ることに情熱を傾けた。ベーレンスは、1907年にA E G (Allgemeine Elektrizitäts Gesellschaft)のためにデザインを行ない、工業デザインの端緒となった。

しかし、シェーファーは、19世紀を通して制作された機能的なモダンデザインは、これらのデザイナーや建築家達の情熱によって新しくつくりだされたものというより、イギリス・アメリカ・ドイツなど、至る処で続いていた土着的伝統的機能主義の結果であったと断言する。そして、この伝統的機能主義は、20世紀前半に発展したモダンスタイルの刺激剤であり、思想的基礎であったが、いわゆる機能主義と同一ではないことを強調している。確かにモダンスタイル(機能主義あるいは国際様式)は、19世紀の伝統的機能主義をふまえ、過去の様式から離脱した主義を確立したといえるだろうが、彼によればそれは、現実にはキュービズムのカノンに支配された幾何学的形態のスタイルであった。モダンデザインの主要な形態が幾何学的であることは、その後の展開の一つである流線形のスタイルと

ともに、一般には機能的適合性ということで説明されてきたが、実際には単に感覚的にアピールするだけで機能に無関係な形態が多かった。

シェーファーの言葉は、いわゆる機能美を強調した家庭用品が機械とのアナロジーによって強要された一種のまやかしであり、単なるソフィステイクーションではなかったかという我々の反省を根拠づけてくれる。それは機械時代を積極的に生きようとする態度の証しであり、機能性を強調した美的シンボルであったかもしれない。しかし、生活用品が本来荷っている素朴な土着性を捨棄してしまい、生活というそもそも泥臭い場の中で、孤独にとりすましたものではなかったか。

シェーファーはひきつづき次のように述べている。1930—40年代に頻繁に開催された、“Useful Objects”, “Good Design”, “Everyday Art” 等の展示会は1950年代には殆んど完全に姿を消した。戦争の間の創造期の後に訪れたモダンデザインの展示期も終り、デザインは後期モダン時代 (Post modern era) とも言うべき時代に入っている。今世紀の前半に理解されていたようなモダンデザインはもはや現代を支配する様式としての権威を持ち得ない。明らかに流行遅れである。しかし、19世紀の機能主義的伝統は、モダンデザインが花開く根となったと同じように、再び飛躍しようとする今日のデザインの根になるであろう。形態は技術によって変化するが、しかし19世紀にその形態を生みだした機能主義的伝統の論理は未来の形態にも適用されるものであるとシェーファーは結んでいる。

工業デザインが転換期を迎えた現在、モダンデザインの根本を問い直したこの書物は、時を得た貴重な書物である。技術的進歩がメカニカルな形態に限定する必要をなくした現代こそ、もう一度人間を中心とした機能主義を甦らすことのできる時代ではなからうか。現代のデザインは、シェーファーの指摘するように、アールヌーボーやアールデコの安易なリバイバルに終るべきではなく、現代生活における機能性とは何かという間の中から新しく創造されなければならない。

松下電器産業株式会社意匠部 羽生 清